

『開目抄』に見られる実践上の一念三千義について

—報恩と法華經行者の値難意識を通して—

桑 名 貫 正

一、はじめに

日蓮聖人の一念三千觀を考察するに當って、從來の研究成果を踏まえると、その特色は天台の一念三千觀は理（迹門）の一念三千にあり、日蓮聖人の一念三千觀は事（本門）の一念三千に立脚しているという。^①『昭和定本日蓮聖人遺文』中、一念三千の名目記述は『註法華經』と四二遺文に一五〇余箇所程見える。^②その中に於て事の一念三千の骨格は文永九年二月五一歳作の『開目抄』（真蹟曾存）、文永十年四月二十五日五二歳作の『観心本尊抄』（真蹟完）、建治元年六月五四歳作の『撰時抄』（真蹟現存）、弘安元年六月二十六日五七歳作の『富木入道殿御返事』（真蹟完）の四書に捉えることが可能である。^③

『開目抄』の重要性は色々な視点から考えられるが、一念三千に関して『開目抄』には遺文中、最多の二十箇所の名目記述を説示す。然も本門の一念三千の初出があり、その上、『開目抄』には名目記述以外に一念三千の有無を實踐の上から言うことが多い。それは日蓮聖人が三三歳の立教開示当時より、久遠実成釈尊への報恩のために、法華行者の値難を覚悟され、忍難慈勝の法華經弘宣流布を続けられてきている。その報恩を支えているものは一念三千な

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

のである。本抄には、そういう一念三千義に関する示唆が随所に言及されているのである。由って、『開目抄』に於ける一念三千義の展開を体系的に考察することは宗学上、意義があると思う。本稿は『棲神』第六六号・第六七号に掲載した『開目抄』に現われた一念三千義（一）・（二）の統篇である。前回までに一念三千の名目二十箇所あるうち⑨の文まで検討を行ったが、今回は⑩の文の前に説示する法華經の行者、値難意識を通して一念三千義の考察をするものである。

二、久遠実成釈尊への報恩

本抄の本論の内容を大別すると法開頭と人開頭に分けて見ることができ^⑧。法・開・頭は「此に予愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに……」（定五四二頁八行目）の文より、「世間の罪に依て惡道に墮^フ者^ハ爪^ヅ上^ノ土^ノ、仏法によて惡道に墮^フ者^ハ十方^ノの土。俗より僧、女より尼多、惡道に墮^フべし。」（定五五六頁三行目）までの文である。一念三千の名目二十箇所ある文で言えば⑥⑦⑧⑨の文がその内容を示す。法開頭を一念三千論で再確認すると次のことが言える。まことの一念三千は、法華經本門の寿量品で発迹顯本（久遠実成の開頭）がされた後に初めていえるのである。まことの一念三千の根底には一切衆生の尊敬すべき者の主・師・親の三徳があり、それ故に一閻浮提第一のまことの仏・法華經本門の久遠実成釈迦牟尼仏を顯わす必要があった。⑨の文の本因本果の法門によって、初めて一念三千の本門（事）の開頭が基礎づけられている。本門の久遠実成釈迦牟尼仏（教相）と本門の一念三千（觀心）の關係は密接不離にあり、この本因本果のまことの一念三千は実は本仏釈尊三身常住の実体を表わしているのである。人・開・頭は「此に日蓮案^ニ云^フ世すでに末代に入て二百余年……」（定五五六頁）の文から「我法華經の信心をやぶらずして、

靈山にまいりて返てみちびけかし」(定六〇五頁四行目)の文をいう。『開目抄』で法開頭が先きに説かれている理由は、法開頭が人開頭(法華經の行者の証明)のための絶対的条件であるからである。それは『守護国家論』(定一二三頁)に見るが如く、善師を選ぶことが最も大切とのべ、その答えとして末代の真実の善知識には法華經を師として選んでいる。従って、善師(法華經の行者)を述べる前には最勝の法を頭わす必要があるのである。何度も繰り返すようであるが本因本果の法門は法華經本門の寿量品の仏、五百塵点劫の實在の仏を表わしている。それ故に本因本果の法門の直後に、こうて顧みればという出だして始まる次の文には、一念三千の根本義が述べられているのである。

かうてかへりみれば、華嚴經の台上十方・阿含經の小釈迦、方等・般若の、金光明經の、阿彌陀經の、大日經等の權仏等は、此寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の學者等近は自宗に迷、遠は法華經の寿量品をしらず。(定五五二―三頁)

又「此過去常顯時、諸仏皆釈尊の分身なり。……今華嚴の台上・方等・般若・大日經等の諸仏皆釈尊の眷屬なり」(定五七七頁)の文も同様の内容である。この法華經寿量品の五百塵点劫の仏は諸大乘經の破せざる伽耶始成を破したる五百塵点仏である『観心本尊抄』の「我等已心釈尊五百塵点乃至所顯三身無始古仏也」(定七二二頁)も同じ内容である。法身は理である。故に法身の無始無終は非因非果でどこにも説かれる。然るに五百塵点劫の久遠実成釈尊は実修実証の本果である。三身円満の三徳仏である。寿量品の仏顯われて諸仏分身となる考えは、日蓮聖人の四箇格言の確信の根底なのである。日蓮聖人の弘通の態度は「仏法を学せん人、知恩報恩なかるべしや。仏弟子は必四恩をして知恩報恩ほうずべし」(定五四四頁)に立脚する。四恩を知り知恩報恩を報ずる基調は四一歳作の『四恩鈔』にも強調され(定二二六頁の文によると立教開宗の当初から見られるので)、終始一貫している。日蓮聖人は寿量品

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について(桑名)

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

の仏の報恩のため、法華經を弘宣流布し邁進されたが値難の連続を経験する。左の文は、その経過をよく示している。今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。既に二十余年が間此法門を申に、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに我身命に及。其上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聴聞の俗人なんと来て重料に行る。謀反なんどの者のごとし。（定五五七頁）

三、法華經の行者値難意識と事一念三千義

『開目抄』は五一歳の著作であるから強盛の菩提心を発して二十余年というのは、逆算するとその発願は建長五年頃になる。これは左記の(2)『頼基陳狀』の文（定一三五〇頁）と一致する。強盛の菩提心を決意するまで、十二歳より三三歳まで「二十余年が間」（定一五五三頁）学問の準備期間があった。発願の折は既に法華經の教理に背くことによりて衆生が悪道に墮ることを覚知しており、殊に法華經の行者の値難を強く認識されていたのである。左の(1)(2)文より我々は、その事を十分に伺い知り得ることができる。

(1)日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申出^すならば父母・兄弟・師匠^{（国主王難）}必来^{べし}。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、法華經・涅槃經等に此二辺を合^あ見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮べし。いうならば三障四魔^{（魔）}必競^{あそ}起るべしとし（知）ぬ。二辺の中にはいふべし。王難等出来の時は退轉すべくは一度に思止^しべし、と且^ややすい（休）し程に、宝塔品の六難九易これなり。（定五五六〜七頁）

(2) 此事申さば大あだあるべし、不_レ申_サ者_ハ仏のせめのがれがたし。いはゆる涅槃經に若_ク善比丘見_ル壞_レ法者_ハ。當_レ知_ル是人_ハ法中怨_ニ等_ニ云云。世に恐_レて不_レ申_サ者_ハ、我身惡道に可_レ墮_ツと御覽じて、身命をすてて去_リ建長年中より今年建治三年に至_リまで二十余年が間、あえてをこたる事なし。『賴基陳狀』興師本・定二三五〇(一頁)

日蓮聖人は行者値難の覺悟で二十余年間、実社会の現実と対決して法華經の法門を弘通し我身には四度の大難、少々難かずしらず受ける。その法難體驗の惡口・迫害等を涅槃經・法華經第二・三・五の卷の文証及び天台・妙樂・東春の法華經を行ずる者は難に合うという文を引き(定五五七七八頁)、日蓮聖人自身が正しく法華經の行者であることの正当性を論ずるのであるが、行者の値難意識は更に堀り下げられて次なる展開へと進むのである。天台・伝教両大師は法華經の行者としての前提に立つも、在世よりも滅後、正法よりも像法、像法よりも末法で迫害が大なることを述べられて(定五五八頁)、左の文の表明に至るのである。

されば日蓮が法華經の智解は天台傳教には千万が一分も及事_ナなけれども、難を忍_ビ慈悲_ニすぐれたる事をそれをもいだきぬべし。定で天の御計にもあづかるべしと存ずれども、一分のしるし(驗)もなし。いよく重料に沈_ミ。還て此事計_ルみれば我身の法華經の行者にあらざるか。又諸大善神等の此国をすて、去_リ給_ハるか。かた_ク疑はし。(定五五九頁)

右の文に注目すべきことが三点ある。第一に日蓮聖人の法華經の智解は天台・傳教両大師に対して千分が一分も及ばないという言葉、我々はそのまま文字通りに受け取ることとはできない。謙遜の表現と見たい。何故ならば、この事について幾つか理由を考へることが出来るからである。従って、これは一応日蓮聖人が天台・傳教両大師に敬意を以て知識上のことで謙遜して譲った表現であると見る事ができる。第二に第一の内容が謙遜の表現ということにな

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について(桑名)

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

れば、日蓮聖人のウェートは次の「難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだきぬべし」の文に係っているのである。これは日蓮聖人が難を忍び慈悲の勝れていることについて、天台・伝教両大師の方が逆に日蓮聖人に対して心から服し敬まうだろうという内容である。この第一の内容と第二の文は又、密接に関連している。これを理事の一念三千論で言えば、日蓮聖人の場合は難をよく忍ばれている。その為には慈悲を持たなくてはならない。この忍難慈勝は法華經の智解に随って命を懸けているので、事の一念三千の実践といつてよい。天台・伝教両大師は智解に止まるが故に理の一念三千の立場にあるといえる。両者を比較して言えば天台も伝教も法華經の説相の値難體驗を分つてはいたが、必要がないから命を懸けない。なぜ日蓮聖人が難を忍び慈悲をださなければならぬかは、末法という時代が要求しているからである。第三に法華經を説の如く流布している以上、必らず諸天善神の御守護があると思うのにそれがない。逆に迫害を大きく受けている事実から見れば法華經の行者と言えないのか？ いや確かに私は法華經の行者である、ただ諸天善神がいなくても知れない？ これはどちらが本当なのか疑う所であると問題提起をだされたのである。この問題は次の文（定五六二頁）と深く関わっている。

但世間の疑といふ、自心の疑と申、いかでか天扶給さるらん。諸天の守護神は仏前の御誓言あり。法華經の行者にはさる（援）になりとも法華經の行者とがう（號）して、早々に仏前の御誓言をとげんとこそをばすべきに、其義なきは我身法華經の行者にあらざるか。此疑は此書肝心、一期の大事なれば、處々にこれをかく上、疑を強くして答をかまうべし。

と述べられしは『開目抄』執筆の大きな理由なのである。これまでの生涯は値難の連続である。法華經の經文には諸天善神が法華經の行者を守護する御誓言があるのに、しかるにない。門弟の中にも疑いを抱き離れている現実があ

り、又このままでは二十年間ついて来ている人をも全く無意味にしてしまう。そこで日蓮聖人自身が法華經の行者として内外を納得させるために、自身にも疑いをだして自問自答の手法を以て証明解決に臨まれたのである。

『開目抄』の一書の問題解決は定五六一頁の全文をクリアできれば、日蓮聖人は邪師でなくなる。むしろ、日蓮聖人は善師となり世間及び自身・弟子・信者の疑いも晴れ根本解決となるのである。

日蓮聖人の立場は本当のところ諸大善神の守護の有無よりも^①

法華經の第五の巻勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此國に生ずは、ほとをど（殆）世尊は大妄語の人……又云、数々見擯出等云云、日蓮法華經のゆへに度々ながされずば数々の二字いかんがせん。此二字は天台伝教、いまだよみ給はず。況余人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。……当世法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん。（定五五九〜六〇頁）

と説示するように、日蓮聖人は法華經の行者の値難体験の有無を以て、末法の法華經の行者たるかどうかの証明根拠を強調されているのである。従って「經文に我が身普合せり。御勘氣をかほ（蒙）れば、いよく悦をますべし」（定五六〇頁）と、末法の法華經の行者としての深い確信に立たれた表明が見られるのである。

その値難意識について日蓮聖人は『開目抄』以前に於て、實際に法華經の行者は必ず難に遭うということを「處々にこれを」書き付けて来た事実があるという（定五六一頁）。この法華經行者の値難意識の事実を検策してみると、①三八歳『守護国家論』真蹟曾存・定一一七〜八頁に勸持品二十行の偈を見て法華經流布に命を懸けた決意の文あり。②三九歳『災難興起由來』真蹟断片・定一六〇〜一頁と③『災難対治鈔』真蹟完・定一六六、一六九頁に勸持品二十

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

行の偈を引き「横羅其殃」をいう。④三九歳『唱法華題目鈔』定一九二―五頁に三類の敵を説示す。⑤三九歳

『立正安国論』真蹟完・定二一四頁に勸持品二十行の偈文を引く。⑥四〇歳『椎地四郎殿御書』伊豆流罪を契機に

「末法には法華經の行者必ず出来すべし。但大難来りなば強盛の信心彌彌悦をなすべし。……大難なくば法華經の行

者にはあらじ」定二二七頁。という様に値難と法華經の行者との関連を述べている。⑦四一歳『四恩鈔』では更に値

難意識の表明が具体的に記されている。「法華經云如来現在猶多怨嫉況滅度後」云云。始に此文を見候し時はさし

もやと思候しに、今こそ仏の御言は違ざりけるものかなと、殊に身に当て思ひ知れて候へ」定二三五頁。「二千年

已前に説れて候法華經の文にのせられて、留難に値べしと仏記しをかれまいらせて候事のうれしき申盡難く候。此身

に学文つかまりし事、やうやく二十四五年にまかりなる也。法華經を殊に信じまいらせ候し事はわづかに此六七年よ

りこのかた也」定二三六頁。「此等の經文を見に、信心を起し、身より汗を流し、両眼より涙を流す事雨の如し」定

二四〇頁。上述の文によれば、本格的な学問は十六歳の出家時で二十四五年立つが、殊に法華經の色読の深さを身

に滲みて味わうようになったのは三四、五歳という点を注目したい。⑧四一歳『教機時国鈔』「法華經勸持品」三後

五百歳二千年法華經敵人可有_レ三類_二記置_一。当世_二當_レ後五百歳_一。日蓮勤_レ仏語実否_三三類_二敵人有_レ之_一。隠_レ之_二非_一法華

經行者。顯_レ之_二身命定_一喪_レ歟。法華經第四云而此經者如来現在猶多_二怨嫉_一。況滅度後等云云。同第五云一切世間多_二

怨難_一信。又云我不_レ愛_二身命_一但惜_二無上道_一。……見_レ此等_二本文_一不_レ顯_二三類_一敵人非_二法華經_一行者。顯_レ之_二法華經_一行者也。

而必喪_二身命_一歟」定二四五頁の文は正に値難意識を明確に表明している。⑨四三歳『南條兵衛七郎殿御書』真蹟断

片「第四卷云而此經者如来現在猶多_二怨嫉_一況滅度後。第五卷云一切世間多_二怨難_一信等云云……日本国の持經者はいま

だ此經文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ。我不愛身命但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華

經行者也」定三七頁。以下は割当枚数の都合上、本文を省略せざるをえない。⑩四七歳「一代五時図」定三〇三頁。⑪四八歳「法門可被申様之事」真蹟35紙存・定四五五〜六頁。⑫四九歳「金吾殿御返事」真蹟断・定四五八〜九頁。⑬五〇歳「四條金吾殿御書」定四九五頁。⑭五〇歳「行敏訴状御会通」真蹟曾存・定五〇〇頁。⑮五〇歳「土木殿御返事」真蹟完・定五〇三頁。⑯五〇歳「四條金吾殿御消息」定五〇四〜五頁。⑰五〇歳「転重輕重法門」真蹟完・定五〇七〜八頁。⑱五〇歳「佐渡御勘氣鈔」定五一〇〜一頁。の十八遺文に記されている事実を確認することができるのである。

四、むすび

以上の文を吟味すれば、これはもう歴史的事実と言ってよい。それほど日蓮聖人は法華行者値難に對する読みが出発点当初から強かったのである。従って、これは諸大善神の守護が有るから法華經の行者としての資格が証明されるところか、守護が無いから法華經の行者ではないという世間の、弟子信者の疑いの見解を以て法華經行者の証明基準の判断をしてはならないとする日蓮聖人の主張は領けられよう。

日蓮聖人は強盛の菩提心を以て、法華經行者の値難意識の覚悟のもとに二十余年間に亘り法華經の法門を弘通せられた。案の定「此法門のゆへに二十余所をわれ、結句流罪に及身に多のきずをかをほり、弟子をあまた殺せたり」(定四五五〜六頁)の値難を受けながらも久遠実成釈尊への報恩の為に実社会との対決をし浄仏国土化、立正安国の運動の実践をされているのである。まさに日蓮聖人の弘通そのものは、あの『撰時抄』(定一〇五三〜四頁及び定一二二頁)の文から類推すると、事の一念三千の実践的振舞に他ならないと見ることができるのである。²²

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について(桑名)

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

〔註〕

（１） 拙稿『開目抄』に現われた一念三千義について（一）『棲神』第六六号）註①の十五の論文と望月歎厚『日蓮教学の研究』

（二一―二二七頁）参照。

（２） 拙稿、右同五〇頁及び註⑥住見。

（３） 『開目抄』の場合は本稿及び前々稿・前稿・（また後稿）等で繰繰論するが定五三九頁、殊に本因本果の法門（⑨の文）定五五二頁と定五五二―三頁全体の内容が最重要である。『観心本尊抄』は定七一頁の内容と「今本時、娑婆世界離三災、出四劫、常住淨土。仏既過去不滅、未來不生。所化以同体。此即己心三千具足三種世間也」（定七二頁）、「十界久遠之上、国土世間既顯。一念三千殆隔竹膜。」（定七四頁）、「像法中末觀音藥王示現南岳天台等、出現以迹門、為面以本門、為裏、界千如一念三千盡其義。但論理具、事行南無妙法蓮華經五字竝本門本尊未法行之」（七一九頁）の文と定七二〇頁の内容が重要である。『撰時抄』は、三度の高名の文（定一〇五三―四頁）と「此の三の大事は日蓮が申たるにはあらず。只偏に釈迦如來の御神我身に入、かわせ給けるにや。我身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申大事の法門はこれなり。經に云、所謂諸法如是相と申は何事ぞ。十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば、仏は世にいでさせ給。智人起をせる、蛇みづから蛇をしろとはこれなり」（定一〇五四頁）の文である。『富木入道殿御返事』は「一念三千、觀法に二あり。一理、二事なり。天台・伝教等の御時には理也。今は事也。観念すでに勝る故、大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門、一念三千也。天地はるかに殊也こと也」（定一二五二頁）の文をいう。因に事の本質を考察した論文に望月歎厚『日蓮聖人の宗教に於ける「事」の本質的構造』（宮本正尊編『仏教の根本真理』所収（二一九―四八頁）があり。それを更に考究し整理し日蓮聖人の事の表現十四箇条にマトメ挙げたものが同著『日蓮教学の研究』（二一八―二二七頁）である。その十四箇条の試論説を補強し概念規定を試みているのが浅井円道『日蓮の本門思想の素描』（『上古日本天台本門思想史』所収・序論七―二二頁）である。又、山川智広は『撰時抄』（定一〇五三―四頁）の文を以て、日蓮聖人の宗教は実現の宗教なり、それは「地上に仏国土を実現する事である」（『日蓮聖人の実現の宗教』三九頁）といい、事には淨仏国土・立正安国の実現という義があることを主張されている。

（４） 「一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり」（定五三九頁）という法開頭の文が初見である。

（５） 拙稿『棲神』第六六号四九―六八頁、第六七号三九―五六頁往見。

(6) 法・人開頭の分け方を恩師室住一妙先生「開目抄續仰(1)科段」(「棲神」第三五号四六、五〇―一頁)、同著「開目抄に聞く」九七頁のタイトルを参照。恩師室住先生の科文を茂田井教享先生は「素晴らしい科文」(「修訂開目抄講讀上下」二八頁)と絶讃す。茂田井先生からは恩師の科文を、あれ程までに深く心底から聖意を汲みとっているとは思わなかったと驚歎され、後年、教育新潮社より先生に名指しで「開目抄講義」の依頼ありしものを室住先生に従順して著述となったのが、あの遠意的な講義の「開目抄に聞く」である由縁を伺う。

(7) 詳細は拙稿「棲神」第六七号四八―五〇頁参照。

(8) 同様の内容は「一谷入道御書」(定九三―四頁)、「高橋入道殿御返事」(定二〇八―七頁)、「報恩抄」(定一一九―八、一二三―六七)にも見える。

(9) 今は理由の一つである法華經本門の久遠実成に焦点を当てて論じたい。法華經の智解とは法華教学全般の義を指すかも知れないが「開目抄」(定五四―一頁)では天台の学者と日蓮聖人も法華經の根本的な特色を十双歎中、二乗作仏・久遠実成という。これは十界互具成立の必須法門で、法華經の極理たる一念三千の根幹である。一念三千の名目記述⑦⑧⑨の文及び「観心本尊抄」(定七一九頁)の文を見る限り二乗作仏・久遠実成・十界互具・一念三千を法華經の尽義(智解)と見て差し支えあるまい。さて確かに日蓮聖人は天台伝教大師の弘通態度を常に讃仰している。文永七年四九歳「善無畏三蔵鈔」の「經文を龟鏡と定め、天台伝教の指南を手ににぎりて、建長五年より今年文永七年に至るまで、十七年が間はを賣たるに、日本国の念仏大體留り了ぬ」(定四六五頁)の文を見ると定五五九頁の引用文通りのまま領けてもよさそうである。然し、一考を要したい。「開目抄」の本因本果の法門によって初めて法華經本門壽量品の久遠実成釈尊の実体が開顯されたことは既に論じてきた所である。本迹相對の教判を以て、天台伝教大師の弘通はあくまでも迹門の立場であるという見解が述べられたのは、「開目抄」と述作が同年の「下方他方旧住善薩事」であり、「天台・伝教等不弘通本門事」の理由を四点挙げて指摘する。そして「天台大師弘通本迹始終、但本門三受未分明、歟」(定三三四頁)という内容は、翌年の「観心本尊抄」に「像法、中末觀音藥王示現、南岳天台等、出現以迹門、為面以本門、為真百界千如一念三千盡其義。但論理員、事業南無妙法蓮華經、五字並本門本尊未広行、之。所詮有、四機無、四時故也」(定七一九頁)と表明されてくる。上述の遺文内容を踏えて佐後には「二千二百余年が間、教主釈尊の絵像木像、暨主聖主本尊とす。然れども但小乘・大乘・華嚴・涅槃・觀經・法華經の迹門・普賢經等の仏・真言大日經等の仏、宝塔品の釈迦多宝等をば書ども、いまだ壽量品の釈尊は山寺精舎

「開目抄」に見られる実践上の一念三千について(桑名)

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について（桑名）

にまします。何なる事とも量^{はかり}がたし」（『阿耨勝法滅罪鈔』定七八四頁）ということを頻りに言う（例えば定七四四、七四八、七九八、八一八、八六六、七、一一八〇、一二四八頁等枚舉に遑ない）。これは本迹相對の教判上で久遠実成を論じているのである。佐前に言う釈尊と『開目抄』から言う釈尊とは天と地の相違があることを言うのであるが、その片鱗は文永七年『小乘小仏要文』（定三一九頁）にも見える。佐前の久遠実成は像法時代の迹門の立場で論ずる天台・伝教兩大師觀の久遠実成であり、佐後の久遠実成のその言っている意味内容は法華經本門壽量品の釈尊を表わしているのである。この事は「去文永中……所詮、在在處處に迹門を捨よく書て候事は、今我等が説所の迹門にては候はず。叡山天台宗の過時の迹を破候也。設如天台・伝教、法のまゝありとも、今至末法、去年の曆^{こゝろ}、如」（『観心本尊得意鈔』定一二二〇頁）の文を見ると、その本迹の實體の相違を一目瞭然に理解しやすい。『開目抄』述作中には、この考えが根底にあったことは勿論言うまでもないことで本迹相對は日蓮聖人の法華經の行者、本門の菩薩（上行菩薩）ということを抑^{おさ}わすために欠かせない教判である。『開目抄』には上行菩薩の先駆けとか上行菩薩としての明瞭なるものの言葉はない。けれども、それを意識し乍ら上行菩薩を支えるもの、つまり法華經の行者としての正当性が論じられている。この証明は「本抄」以外にはどの遺文にも見当たらない。法華經の行者としての最も終極が三大誓願という。その三大誓願を表明する下りに「なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用じとなり。其外の大難、風の前の塵^{ちり}なるべし」（定六〇一頁）の言がある。智者に我義やぶられずば用じとは、南無妙法蓮華經を離れて成仏はありえないという理論を破られない限りはどんな目に遭うとも法華經を捨てないぞという決意を述べたものであるから、これは正に法華經本門の智解に対する日蓮聖人の絶対の自信の表明なのである。この三大誓願も実は事の一念三千義の表現に他ならないのである。上述の内容から謙遜の表現であったということを知ることができである。

(10) 法華經が末法に流布する認識を日蓮聖人は早いうちから懐いていた。後後五百歳強調の文は『守護國家論』（定九六、一〇二頁）から論じ、同時に法師・勸持品の經文を引き法華經流布の値難覺悟を説示する。三類の強敵の意識は定一九二、二一四頁と続き、やがて値難の體驗上から『権地四郎殿御書』で「大難なくば法華經の行者にあらじ」（定二二七頁）と断言するに至る。そして『四恩鈔』にて法師品の如来現在猶多怨嫉況滅度後の文を「殊に身に当て思ひ知れて候」（定二三五頁）との実感を語る。『南條兵衛七郎殿御書』に右の法師品の文を體驗するは「唯日蓮一人こそよみはべれ。……されば日蓮は日本第一の法華經の行者也」（定三三七頁）との表明をされる。『開目抄』（定五五八、六〇頁）では三類の強敵及び勸持品

二十行偈の値難の数々について天台・伝教両大師は像法時代なるを前提に未体験なることが繰繰述べられ、日蓮聖人のみが体験することを論証されている。又、その体験の差については定一五二頁を参照されたい。

- (11) 諸天善神の守護が有るか無いかの問題で、法華經の行者の説明を論ずることはできないことを『開目抄』定五九九〜六〇一頁でも論証している。

- (12) 日蓮聖人の法華弘通の行動に事の一念三千義があると捉えたのは、本稿の註③『撰時抄』(定一〇五三〜四頁)の文を往見されたい、法華經の一念三千の大事の振舞と表明されている。又、『富木入道殿御返事』の「一念三千、觀法に二あり。一理、二事なり。天台・伝教等の御時には理也。今は事也。觀念すでに勝る故、大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門、一念三千也。天地はるかに殊也」と(定一五二頁)の文にも注目する。それは『開目抄』に於て日蓮聖人が、天台・伝教両大師は自分に対して「難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだきぬべし」(定五五九頁)と宣言され、そして法華經の「数々見擯出等」の文について、「日蓮法華經のゆへに度々ながされずは数々の二字いかんがせん。此の二字は天台伝教いまだよみ給はず。況余人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。……經文に我身普合せり。御勘氣をかほ(蒙)ればいよく悦をますべし。」(定五六〇頁)と表明された文には、正に「觀念勝る故に大難(値難)又色まさる」の文との脈絡が見られるからである。日蓮聖人は『開目抄』述作中に、天台・伝教大師よりも觀念勝る故に値難の現象を大きく受けているとの意識を明確に懷かっていたことを確認できるのである。觀念すでに勝るといふ日蓮聖人の確かな強い認識は佐渡に來て法華經の行者としての証明を果し、上行自覺を意識しての上から始めて断定して言えることなのである。

The Practical Meaning of the Three Thousand Existences in One Thought in Kaimoku-shō
Kanshō Kuwana

開目抄 一念三千 法華經の行者 値難意識 久遠実成

『開目抄』に見られる実践上の一念三千について(桑名)